

早期体験学習を通しての人命救助意識の向上

○中村 武夫¹, 三宅 義雅¹, 伊藤 栄次¹, 桑島 博¹, 松野 純男¹(¹近畿大薬)

【目的】生命に関わる医療人を養成する薬学部における教育は、これまで以上に知識・技能・態度を重要視した統合型教育となっている。その目的の達成には、救急現場に遭遇した際に、適切な態度・行動がとれるように医療ボランティア精神を培いながらヒューマニズム教育を実施していくことが必要であると考えられる。今回、早期体験学習において心肺蘇生講習を実施し、薬学生の人命救助に向き合う姿勢、心構えについて検討した。

【方法】薬学部1年生の早期体験学習の一環として実施した心肺蘇生講習の際に無記名自記式アンケートへの回答を依頼した。なお心肺蘇生講習はインストラクター資格を有する教員の指導下、ダミー人形およびAED訓練器を学生10名に1体(1台)として約3時間行った。

【結果・考察】講習開始前の人命救助に対する意識について、一人でも応急手当をするとの回答は「自分にとって大切な人」の場合、約40%であり、「他人」の場合、10%以下であった。手技習得後、同じ質問に対する回答は、それぞれ約70%および約35%となり、講習を通して手技を学ぶことにより人命救助意識が向上した。その後、救急現場で感じると思われる「3つの恐怖」を伝えたところ、救助意識が低下した。「自分にとって大切な人」の場合においては大きな意識低下は認められなかったものの、「他人」への救助意識は大きく低下した。さらにその後、善意で救急蘇生を行い、重大な落ち度がなければ、その結果を法的に問うべきではないという「善意に法的責任なし」を伝えたところ、手技習得後に相当する程度以上までに人命救助意識が向上した。社会の要請に応えられる医療人養成に向けて、さらに生命を意識したヒューマニズム教育の充実が必要である。